

## 第6回国外調査（スタイン・デボラ講師）レポート 【ポートランドプラン】

常滑市 堂本大輔

### （1）ポートランドプランと改正総合計画の動き

ポートランドプランは、まちの包括的成長戦略であり、基本計画と5年ごとのアクションプランから成り立っている。これは、市が市民から十分な意見を聞きながら策定したものであるが法的拘束力はなく、これを法的拘束力を持ったゴールへと導くために、総合計画改正作業を進めている。

① 多様なコミュニティの参加を募り、②これらの意見を分析し、③代替案の検討を行い、④最終的な政策決定を行うという手順を進めており、現在③と④の段階である。

コミュニティを通じて多様な意見を5月まで集めた。主に以下の内容が出されている。

- ① 貧困をなくす。
- ② 経済を立て直す。
- ③ 自然をもとにしたデザインを行う。
- ④ 全住民が参加可能な公的プロセスを経る。
- ⑤ 若者の活躍を重視する。
- ⑥ 健康的な食材を確保する。
- ⑦ 交通アクセスを強化し人と場所をつなぐ。
- ⑧ 個性豊かなネーバーフッドを活用する。

こうした意見を踏まえて、ネーバーフッドをパターンニングし、分析結果と照らし合わせて代替案を検討している。

### （2）市民へのアプローチと課題

今後、市民参加の準備を進めて9月にこれを提示する。市民から意見を募った後は議会にかけるが、市民参加の方策として3つのアプローチを用意している。

- ① 市民への質問事項を設定し、特定の地域でワークショップを行う。
- ② コミュニティに対しあらかじめプレゼンテーションを実施する。

③テクニカルな情報を市民に提供する（特に学生や移民、ローカルビジネスを行う人を中心として）。

ポートランドプラン策定の段階で、5年以上の歳月を費やしたために、市民の中には疲れも見えており、また、共有すべき情報が非常にテクニカルなため、長期間になることに拍車をかけてきた。この間にトップが3回変わっているという問題もある。

ポートランド市の人口動態は多用で、人種的にも配慮が必要であり、移民のこと、マイノリティのことも考慮する必要があった。これが大きなチャレンジであり、多様な主体を巻き込むことをとても意識してきた。

まずは、コミュニティのリーダー達とコンタクトを取った。担当職員を配置し、市民参加のリーダーを各コミュニティから輩出してもらった。各リーダーと話し合った上で、リーダー達がコミュニティへ戻って、それぞれの内部で話し合いを持ってもらうよう工夫した。

### **（３）行政職員と市民の変化**

担当職員達は、リーダー達と関わる中で、基本を見つめ直し、謙虚になる必要があった。それは、実際にリーダー達と関わってみると、市の意図に沿った適切な方向へ向かうことが困難だったからである。職員たちは、基本から学び合った。コミュニティによっては、全く興味のない行政分野もあるが、それも考慮せずに、意見を聞こうとしている姿勢も反省した。

こうした、学びや反省を経て、コミュニティの中で市民が参画する環境を整えていった。ワークショップにおける、託児や資料の多言語化などにも充分配慮することも学んだ。障害者や高齢者にも配慮した。こうした市の姿勢によって、やがてコミュニティ側の態度にも変化が生じた。

まだまだ、住民へのアプローチは不十分だと感じているが、テクニックではなく、良好な関係性を築くことを前提に、市の謙虚な姿勢を継続することの大切さを知った。

### **（４）市としての成功**

今は、2つの大きな成功を示したい。

①目に見えないコミュニティ・市民との人間関係を築いた。ただし、マイノリティがワークショップへ参加することは、少ないのが現状である。

②市民の市政に対する意識が高まってきた。

最後に、もっとも重要なのは当然①であり、何より信頼を築いてきたことが大きな成果だと思っている。

—以上—

^\_